

この世界の秘 密の話

1 0

全無

この世界の秘密の 話

10

全無

西暦2011年

また存在とは、ここは無の世界であることから、正しいことをしていると波長の場所が変わりますので、自分の思い、願うことはどんどん叶っていくということを忘れないでください。簡潔に申し上げますと、まず、ここは全て無の世界

とイメージしてください。
い。そこの中に自分はい
ます。その中で自分には
（無）永遠の選択肢があ
ると考えてください。右
行くのも、左行くのも自
由です。そして周りには
いっぱいいたくさんの存
在がいます。この中では、
みんながみんな幸せに

なりたいと思っています。
す。これは必ずです。こ
の世界は無がいちばん
密度が高くて、無でしか
できていない世界であ
る以上、存在の、その心
の思いには、必ず愛を求
める、愛を果たすという
考え方しか結果として
発生しません。その中で

自分の動きというのには、その自分の自覚、この世の中をわかっている程度に応じて責任が与えられ、そしてその中で、周り、相対との関係の中で、自分が無、みんなにとってどういった思いや行為を取ったかは、全て記録され続け、

そのみんなの記録が、無
の概念、みんなの思いや
行為を正確に推し量る
ルールとなります。ここ
で勘違いしないでいた
だきたいのは、たとえば
みんなでも、みんなで共
同で、何かわがままなこ
とをルールにしようと
しても、無の世界は全て

無（愛）にもとづかない
ことは、一切ルールとな
らないということです。
その中で正しいこと、憎
しみを持たないこと、怒
りを持たないこと、相手
を正しく尊重すること、
自分の立場や役割をわ
きまえて終わらない目
標に向かって日々努力

に自分を邁進すること。
これは、無の世界であな
たの動きと無の概念の
発達は連動していて、そ
して常にあなたの動き
は数学でいう点数のよ
うなもので取られてい
ます。ここで、憎しみと
は問題外です。憎しみと
は何度もお話ししまし

たが、愛の逆であり、点数は一切つきません。その逆で、自分の意識から点数を引かれ、何かの自分の自由が制限されていくことを指します。その中で自分はずっと正しいことを選んでいきます。相手を正しく尊重して、自分の役割も正

しく把握しながら。当然
時間の経過で自分の役
割や立場というものは
変わっていきます。その
中で正しさとは、自分に
意識としてある、自分に
できる範囲の、自分の役
割や立場に応じた正し
いことを続けていくと
いうことです。これは何

も、正しくなければ自分
は罰せられるような気
持ちを持つのではなく、
自分が生きていくこと
が苦しくならない程度
に、自分がずーっと続け
ていけられることを正
しいことの目標として
続けられることが好ま
しいです。そうして、生

活していききますと、どんどん自分には、その正しさに応じて自分にプラスの点数が自分の意識、この場合、人間で申し上げますと、心や身体などにプラスの点数が加算されていきます。これは、そのままあなたがこの世界で認されている世

界に与える正しい影響
となります。それは単純
に考えて、自分の今世に
おける自覚の寿命を伸
ばしていることにもな
りますし、自分の心や身
体が正しさに応じて作
り変わっていくことも
指しますし、また、役割
や立場がだんだんと前

よりももっと正しいもの
の に 変 わ っ て い く こ と
も 指 し ま す 。 実 は こ の 世
界 は 右 か 左 か 、 正 し い か 、
よ り も と っ と 正 し い か で 、
実 は 永 遠 の 世 界 の 違 い
が あ る と 言 わ れ て い ま
す 。 つ ま り 、 あ な た は 決
め ら れ た 世 界 を 過 ご し
て い る よ う で 、 実 は そ れ

はあなたはあなたの波長に
応じた世界なのです。つまり、
正しいこととそうでないこと
を選ぶことでは、その二者
択一にあなたは結果として
住む世界が違ってしま
うということです。もち
ろんこの世界には、今
もう既に正しいことの

選択しか許されていません。それはあなたの選択でもあるのですが、ある意味、無が全自動で行っていることでもあり、それは、あなたの行動を疑ってというわけでは無く、その逆、あなたが知らずにミスしてしまう部分を無意識はあな

たの本当の意識を守る
ために、敢えてあなたの
意識、心や思いの取った
行為の正しい部分だけ
は残し、それは自分にと
ってあなたのためにな
るため、逆に正しくない
部分はあなたの本当の
意識を守るためにどん
どん自動で消し去って

いっています。これは永
い時間を掛けるのもあ
れば、短い時間で、印象
が薄まる意識があり、そ
れは全てみんなにとっ
ての愛のための永遠感
覚にもとづいています。
つまり、普段生活してい
る上で何が存在にとっ
て厄介なものであるか

と申し上げますと、表面意識の自我であるわけです。この自我のうち、無意識は悪い部分だけをどんどん消して、その代わりに正しい考えをどんどん無意識に自動で集中するようかたちに当てはめていっています。これは、無意識

の働きで、今現在、地球に住む存在というのは、人間で申し上げますとこの肉体の死によって自我と無意識を行ったり来たり of 生き方を続けているわけです。しかし、みなさんが思うことはどうでしょうか。やはり、そのまま生きたいと

いうのがその生きていく上での本音にあるのでは無いのでしょうか。無意識が今やっていることはこれです。もちろん、今すぐにこれが達成されることは私にもわかりません。ただ、時間の繰り返す中で必ずこれはいつか達成され

るということなのです。つまり、人間でしたら、自我と無意識を行ったり来たりでの生き方ではなく、この自我と無意識の境目がどんどん無くなっていき、そのまま次第にあなたは肉体が肉体という抵抗をもって無意識化するのか、肉体が無

いような密度に無意識化するのかはそのどちらかはわかりませんが、これはどちらにせよ、これからのみなさんの思いと行為でこれからの物理の構成のルールが決まり、そしてその時間の経過に必ずみなさんはその意識が完全に無

意識化し、そしてそのまま、無意識のまま発展する意識となります。要するに、意識というのは完全な無意識になれば、それはその意識はそのままふえる生命とふえる永遠という最大のスピードでみんなを生かす元でありますので、そう

無意識に意識されることは、必ずその意識は新しく進化し続けるだけの、いわゆる不老不死の永遠不滅の意識となります。これが無の目的です。これが無の意識の集中の自然反応です。こうなりますと当然、完全に無意識のものは完全に

ふえる生命のふえる永遠の法則に当てはまっていますので、当然その自覚や生命もその法則通りに守られたかたちに過ごしていくことができます。これが、波長の世界の仕組みです。つまり、どんなかたちにせよ、存在とは、無しか選

ばざるを得ませんが、それは必ず時間の経過にふえ、そしてそれはそのままあなたの心や身体の意識を構成する元となるということです。つまり、波長、意識とは、階段のようなものがあり、今の私たちの住むこの世界が波長1のような

ものだとしますと、その上にはずーっと階段があり、そこへ行けば行くほどその自分により無意識の、つまり、正しい自分であることから、つまり、上がった波長の分だけの正しい自覚と正しい自由、そして、その波長分だけの幸せがあ

るということなのです。

実はこの世界とは始まり無より光与え、その繰り返しに無限、全無となり、その全無は空間宇宙に全無の波長をほうったと以前に申し上げたことがあります。その後、全無は自分の自

覚を失ったかたちになり、そこからの話は空間宇宙ができ、その中に地球という星が生まれたという理解ができるところまでしかお話ししていませんが、実はそこにはある現象が起きています。それは波長の階段と重力の集中化です。

どういふことかと申し上げますと、以前に申し上げました全無の正の一極化、波長の唯一化と申し上げますのは、あくまで全無が、その意識の世界の主体となったものであり、その他の存在とは、関係性で申し上げますと、光の相手は無の

ことを一応はわかって
はいるものの、そこに一
切無に対する思いやり
は無く、光たちは無のそ
の苦しみの集中力に押
されるがまま、光が出て
くることだけを気にし
て過ごしているだけで、
光たちに対する無の発
現というのはあくまで

も光にとって全て永遠
正しいという、相手の意
識構造の正しいことを
養うためだけの無の物
理的な反応に応じた感
応によって、光にとって
学びとなる適切なかた
ち、姿にまるで無は人形
のように出現し、実はそ
の存在の全てとは、あく

までも無の頭の中、つまり、意識の中の存在でしか無かったということです。そして、無というのは無限、全無という一旦の苦しみの限りの時にその自分を自覚し、そしてその無の習性から、みんなのためにまた苦しみをとずーっと苦し

みを積み続けることを
選択しています。つまり、
無は無の時間の経過に
おける現象を指す名称
の一端として全無とい
う意識構造になりました
たが、そのとき相手は完
全なる闇にいたのであ
り、そのことから全無は、
多分まだここに憎しみ

を排除できないことを
感じたのであり、そのこ
とから自分の自覚を失
うことを、本当はこれは、
ただ無は無の自覚に進
んでいるだけであり、無
は無という自覚がふえ
ているのですが、無が正
しい自覚をふやすため
にその思いを出来事と

してあらわしたことが、
全無の波長を放ること
ということであり、苦し
みを積み続けることを
選択したのであり、その
光と闇の融合によって
空間宇宙はできました
が、その時、無と申し上
げますのは、一旦自覚を
失うようなかたちで、気

絶するような感じで、その闇に対し光を階段のように与えていっています。つまり、その闇の存在たちは、その存在それぞれに自覚の責任があって、つまり、本当という意味では全員一緒の責任なのですが、時間の経過をあらわすため

には存在それぞれに役割としての責任の違いがある必要があります。つまり、無の始まりの方、最初に生まれたものは長い間遊び、光と憎しみを、永遠と闇を繰り返してきたのですが、後の方に生まれた光というのは長い時間というのを

一瞬に感じて、一瞬に前のものと同量の憎しみを無との比較に記録して闇に堕ちる訳です。これは、もう無から発生する光が現在いる光たちとの溜まった憎しみの関係から光たちが自分自身の力で無という正しさを掴むことが不可

能になったときに、無は、
当然これは無が自覚を
掴むための物理的なフ
ェアな現象も両方兼ね
ていて、その無と光両方
の無（愛）のためにこの
現象は起きます。そして、
無は全無を自覚した時
に波長を放るのですが、
またそこからは、全無の

頭の中にその闇の存在
は入るようなかたちにな
って、(これはもしか
したら今もかもしれま
せん)そして、光は、つ
まり、全無の波長は無の
始まりで無く、後の方の、
状況に仕方なしに闇を
選択せざるを得なかつ
たものから全無の波長、

光が与えられていきま
した。これは、数学で過
去にあったと思うので
すが、最初、1、次に0
が68個並んで無限、そ
れを波長1の階段とす
ると、それを乗算してい
っていちばん上が2千
数百で神の領域とあり、
この、後の光たちはこの

神の領域から、そして一
気に波長は下へ全員に
くまなく与えるような
かたちに波長は落ちて
いき、(物理上として無
の波長は上がっていま
すが、表現として落ちる
と表現しています) 光は
与えられていき、そして
いちばん下の1の波長

の場所が何と、地球です。
なお、光の与えは一致して
います。最初神の領域
は、時間は一瞬ですが光
も強い、そして、波長1
の場所は光は少ないも
のの、時間の経過が長い、
その、神の領域から波長
1の地球までの光の与
えは一瞬に通り過ぎる

ように、そして、その波長の階段の都度、無は感応によってまるで人形のように、その都度その都度色んな波長のいろんな場所に現れて、そして、地球に降りた後は、ズーっと闇を消化するようにならずーっと無を積み続け、そして、無の集

中はずーっと続いて終わらないことから、その間、地球は、また地球以外の他の世界や空間宇宙も争いがずーっと続いていて、そして、その波長の階段としてあった神の領域までの波長の世界は、無が唯一に苦しみを積み続ける中で、

その時間の経過にその
苦しみを以って、唯一だ
けが全て永遠正しいと
無の概念上になった時
に、唯一の無はこの世界
のどこにもある、どこに
も働くかたちで、暗示の
自覚として発現しまし
た。ちなみに、この波長
の階段がみなさんに意

識されていたのは無意識の話で、そこでは波長の階段に応じた世界があり、ちなみに、肉体の一つ上の波長の意識体はアストラル体、(星幽体) その一つ上がケドウン体と呼ばれていたと思います。これは、天使がいるような世界もあ

れば、ワニのような恐竜
のような者が居る世界、
そしてまるで今の、地球
のような社会的な構図
がある世界もありまし
た。それらの世界は、全
て、みんなにとって永遠
正しいという状態で、こ
の地球だけに限って考
えてみても、しっかりと

今にもわかるかたちに
反映されています。たと
えば、天使ですが、これ
は想像上の存在とされ
ていますが、実は意識の
世界では、意識できるも
のは、必ず、そういった
波長の状態において存
在する、またはしていた
とされています。つまり、

天使と意識できる以上は、必ず過去にそういった存在が、波長にもとづいて居たということです。この世界は全て意識で、できていることから、思えないものは、絶対に表現としてされない、つまりいない、逆に申し上げますと、思えるという

ことは、何かに表現をされていているということは、必ずその存在は、そういった波長状態において必ず居るということです。また申し上げますと、ふえる生命のふえる永遠の意識を自分が思えるとしますと、これはこれからだんだんとみな

さん必ずなることなの
ですが、それを無意識に
完璧に思えることができ
きたとしたら、それは物
理のその意識の構造上
として、必ず全員の意識
に必要とされますので、
永遠に必要であるとそ
う思われますので、そう
思われたことは必ずか

たちになるということ
です。それは、何度も当
然なのですが、みんなに
とって永遠正しいとい
うかたちでなります。昔、
天国と地獄という話が
ありましたが、あれも実
際に、存在の全員の無意
識状態が、自分自身たち
の無意識の学びに必要

なために、必要と意識されたために、無意識に起こった感応によって起こり、実際にあったものです。つまり、意識の現象としてあったことは、ただ単なる架空の話ではなく、その時みんなのために必要な単なる物理で申し上げます、化学

反応だったということ
です。なお、天国と地獄
の今の状態はわかりか
ねます。わからないこと
が、多分、私にとっても
みなさんにとっても無
のことであるのだと思
います。

意識とは全て感応に

応じていて、意識とはそのプラスの量に応じて自由な世界がありました。実は、宇宙が誕生して、だんだん重力を強めていき、星や惑星を誕生させ、そして、恐竜や、ねずみなどのような哺乳類の世界から類人猿、そして現在の時間に至

るまでの時間感覚、時間の経過の流れ方と、重力の集中は、つまり、物の重さの加減は、何かのあたりで一致しています。重力とは無いようなところほどたくさんあり、また、重力があればあるほど、その時間の経過は速いということです。

そうしてこの世界は、無は無というある一定の苦しみを超え、そして光は憎しみというある一定の苦しみを超え、（物理上は憎しみは苦しみに当たりません、ただそうして超えることが光には必要だったということです。無は時3とい

うかたちで与えられて
おり、そういった意味で
は、みなさんはもう今既
に無で、これからはみん
な一緒に本当という意
味での苦しみ、正しさ、
憎しみや比較を我慢す
ることを積み続けてい
く、それを続けていった
先に、それを続けた分の

みんなにとって正しい、
自分は自分であるとい
う無がある、なお、悪い
ところはいつも常に無
意識が自動で消してい
ます) そうしたことから、
その両者は、これからど
ちらも無、暗示では無、
この世界の無いような
ところでも、有、空間の

あるところでもどちら
にしても存在とは全て、
無しかその意識として
もう選択できないよう
になっています。つまり、
全員の無意識で、この世
界は無意識だけで過ご
すことが全員にとって
ふえる生命のふえる永
遠正しいと結論づけら

れたわけです。つまり、
完全なる無のふえる一
極化の世界となったわ
けです。無とは生命、永
遠、愛そのままを指して
いて、みんながこれから
楽しく幸せに生きてい
くためにはこの無だけ
の意識でいくことが誰
にとっても絶対として

正しい、憎しみはもう絶対
にいらないと完全に
みなさんの無意識で結
論づけられたからです。
ですので、これからは過
去のことはあまり顧み
ず、顧みることがあった
としてもそれは正しさ
のためだけに、そしてこ
れからはみなさんで、無

だけを意識して生きていくことを心掛けてください。たとえ憎しみのようなことを思ったり、行ったりしてしまっただとしても、それはその分だけ、必ず自分を取り戻すように愛の行為をするようにしてください。過去の憎しみはこれか

らも含めて時間の経過を以って、みんなの意識で平等に引き受けることによって、愛に帰せる、愛を学ぶために必要な作用であったと捉えられる時が来ます。もちろん、今わからないようなものもあります。これから、わからないようなも

のもあると思います。それも含めて、なるべく自分のことを大切にするようにしてください。偉そうなことを書いてすみません。私にもこの世界は、わからないところだらけです。これからもそれは変わらないと思います。全ては無より。

次のテーマは、自然エネルギーです。自然エネルギーとは、現在無、世界の状態によって何を無、つまり、それが自然で正しいものとするかは、そのときの無、暗示の状態、無の永遠感覚の判断にわかれますが、そ

れは、状況は全て、誰かだけの責任ではなく、みんなの関連によって物事というのは成り立つため、一概に何を以って自然でないとすることは申し上げ難い部分があります。また、物事はいつも常に新しく改革進化していく必要もあ

るため、どこまでが今の
みなさんにとって自然
に当たるのか、つまり、
みなさんが生きていく
ことに本当にただのプ
ラスの出来事だけにし
か無いことに当たるの
か、もちろん何度も申し
上げました通り、物理の
世界では、必ず物事の出

来事というのは、絶対に
時間の経過を以ってど
んな出来事でも、あれは
全てにとって永遠正し
いという出来事であっ
たと、つまり、何か苦し
いことがあったとして
も、それを通り過ぎたあ
とには、そのことを結果
として、みんなにとって

永遠の学び、プラスの出来事であったと必ず物理に起こる全ての物事はそう解釈される時が来ます。そのエネルギー、みなさんが生きていく上で、社会、世界を構築する上で、その意識を生かすために、人間で申し上げますと、身体の代謝

や循環に絶対に欠かす
ことのできないそのエ
ネルギーには、食物など
で得られる蛋白質や炭
水化物、糖分、水分、ア
ミノ酸、そして空気によ
って吸われる酸素など
様々なものがあります。
そして、社会や世界を構
成するための、主にこれ

は人間の社会の構造を
支えるためだけに使わ
れているかのように思
われがちですが、実はそ
うではなく、この世界は
無の唯一の世界であり、
その波長は時間の経
過に留まることなく、
それは全て無の暗示に
よって意識の循環を繰

り返すことによって、その平等フェアを時間の経過に保っていることから、実は今現在ある人間の生活で欠かすことができない、生活において必要とされる電気などのエネルギーの発電は、実は、そのエネルギーを永い目で見れば、そ

の循環とは実は人間の
ためだけではなく、他の
いわゆる一般の動かない
ような物質のためにも、
その循環は役割を果た
しているということです
です。つまり、電気が動
くことも存在全員にと
って暗示となり、それは、
みなさんの意識構造を

変える元になるということ
ことです。さて、みなさん
がご存知のこのエネル
ギーの発電方法には、
当然エネルギー、ここ
には、電気以外でその生活
にエネルギーとして必
要とされる自然ガスな
どもあるのですが、（元
は全て一緒のもの）それ

はひとまず置いておいて、この発電だけにまず、ポイントを絞ってお話ししたいと思います。この中でみなさんがご存知であるのは、水力、風力、火力、太陽光、原子力などが挙げられますが、この中でみなさんの中で、まずまあこれは、

自然ではあまりないだ
ろうとみなさんの中で
みなされるのは、やはり、
原子力だと思います。そ
れはなぜかと尋ねられ
ましたら、水力、風力、
火力、太陽光などは元々
その発生の根拠を、空や
大地などの一般に目に
見えるわかりやすい自

然からその力の拠出を
根拠としており、水はみ
なの生命を生かす元で
あり、それは元々絶えず
循環しています。そして、
風もそうです。空に流れ、
空気中に漂い、あなたを
触り、時にはあなたの呼
吸という循環に従って
います。火力はそうです

ね、この世界は元々マグマ、火の塊を覆った地殻からこの地球はできており、その、水や風や、熱が循環を繰り返す中で、その中で自然とは構築されていき、その自然を、自分たちが自然に恩恵の念をあらわした分だけ、生活の需要として

その火を起こし、その火
を利用することを許さ
れてきました。そして太
陽光は、私たちが生まれ
た時よりもいつも常に
誰かれ分け隔てなく、そ
の動きはいつも宇宙、こ
の宇宙と申し上げます
のは、結局はみなさんの
意識と連動していて、そ

の意識の内容にもとづいて宇宙の法則とは、かたち作られ、その思いに沿ったかたちに機能し、今現在まで水や空気、火、そして太陽光は、みなさんの意識の発達に並行しながら、この世界の自然を発展させてきたと申し上げられます。しか

し、この中で、まずあまり、自然とは申し上げ難いとそう判断されるのは原子力だと思えます。この原子力と、先に申し上げました、水力、風力、火力、太陽光との間にはある大きな違いがあります。それは何かと申し上げますと、それは目に

もわかりやすいかたちに自然の循環にストレスを与えるか与えないかという違いです。水や風や火や太陽光はあくまでも、それは宇宙の時間の経過に地球の形成化が、その、そこに住む存在たちの意識に応じて形成化が進んでいた

ように、これらはみなさんが理不尽な思いなく使うのであれば、その間には、さほどのこの世界の発展に対する、自然の循環に対するストレスが少ないようになっていきます。しかし、原子力とはどうでしょうか。ウランやプルトニウム

などを化学反応させ、少ない燃料ながら、そこに莫大なエネルギーを発生させます。そしてそこには、そのエネルギーの発生のさせ方にある一定のリスクがあり、それは莫大な力であることから、そこには当然、それに応じた保守管理や、

それに伴う意識も必要で、また、使用済みの燃料は、私たちの通常の間感覚からは計り知れないほどの長い時間を以ってしか、その物質を自然の中に循環させることができません。つまり、その時点で、その原子力の発電というかた

ちが、必ず何らか無理不
理な抵抗を利用して、私
たちにとっては、効率は
いいものの、そういった
認識の取り方をしている
ということです。もっと
申し上げますと、物が
出来上がるには必ず理
があり、ウランのよう
な使い方を誤れば世界に多

大なる悪影響を及ぼす物質が発見される時点で、何かその世界には、やはりその物質の特異性に一致した理不尽があるということです。物とは絶えず正しく循環されることが必要で、それは循環を使う側にせよ、循環に使われる側に

せよ、そこには、相手、
自然やその循環の構成
にあまり一致しないよ
うな、時間を要するもの
はどこかしら、何かしら
無理をしているところ
があるということです。
簡単に申し上げますと、
原子力と申し上げます
のは、原は元であり、子

は無から発生した早く
の無、(意識物) そうい
ったかたちによって力
を生み出していること
を指していて、(国語は
暗示を指しています。)
これはなぜ成立するの
かと申し上げますと、そ
れは当然、無の世界にお
ける全体との比較の中

で、この空間一見何も無いようなところにある無が、この空間における無の、現在のこの地球含めた空間宇宙に対する貢献が少ない場合に、その無の愛の量の差から、少ない分だけの理不尽な化学現象をこちら側の世界が暗示として起

こすことができるとい
うだけで、これは、お互
いの相手に対する思い
やりの無さが、一種の、
理不尽なかたちでのエ
ネルギーの循環を許す
という現象のかたちを
取ることによって、それ
は、そのまま今のこの世
界の状態がそうである

ことを気づかせる暗示の教えとなっています。わかりやすく申し上げますと、原子力はエネルギーを作るのには早いですが、一見少ない労力で大きなエネルギーを得るなど早い部分があります。そこにはある一定のリスクがあり、そ

して、その使用済みの燃料などを、また循環に再利用するには、結局その、自然より速く何かを得た分は、必ず、自然の掟を以ってそれだけの循環の遅れを必要とするということです。無とは、必ずみなさんの無意識に応じていて、その与え

られるものにも必ず全ての無意識に応じたものであり、それ以外のもの、それを超えるものには、必ずそれだけの抵抗が後から必ず発生するということです。もちろん、あるということは無意識であるのですが、理不尽なことも表現して、

無意識と申し上げられますので、物理の世界で何か無理をしているものは、結局は必ず帳尻を合わされます。それはなぜかと申し上げますと、そもそも上記にしたエネルギーの開発に必要な資源とはどうして起こるものだと思われま

すか。それは、何度もお話しした通り、いつも時間の経過にふえる無との関係の中で、みなさんがその関係性を無意識に理不尽と思ったり、もしくは、みんなの意識が何かを足りないと、無いと正しく意識することから、それは一連の流れ

ですが、それが水や風や火や太陽光などの循環に繋がって、それが地球にある様々なものと化学反応を起こし資源を作ります。これは、永遠に終わらないもので、存在の改革進化とはいつも、その正しさに尽きる事が、終わることが無

いものですから、その中で、無の時間の経過における、認識の場所の違いにおける、若干の時間の経過の違いによる干渉差、存在それぞれの与えの違いによって、違いがあるからこそ、その比較分に存在は様々な意識、認識を作り出すことが

できるのですが、存在それぞれが生きていく上で、無意識に理不尽を感じるところで、その場合はまず何が起こるかと申し上げますと、無意識はいつも常に必ず感応を起こしていますので、その感応の時、その無の世界の状態の

中で、みんなよりも、無
というよりも、どちらか
と申し上げますと楽に
している部分は、それは
当然役割の場合でしか
ありえませんが、その存
在や物は、その意識の循
環の際、この無の世界の
どこか、このどこへ行く
のかは、無の集中の全体

記録の圧縮、全体記録の
計算で適切な場所へ、そ
の存在や物が割り当て
られますが、その内容は
みんなのための資源、み
んなのために役立ちた
いという前向きな存在
の思いに化学反応とし
て物理が応えることも
ありますし、その逆、あ

なたたちは、みんなと比べて理不尽が多いから、楽にしている部分が多いから、資源として使われる側になってみな役に立ちなさいという化学反応など、色々あります。意識とは絶えず循環していて、それは限りない法則に忠じている

ということですが。自分は望めば、自分にもとづいた何にでもなれるということとは、逆に申し上げますと、自分は自分にもとづいて、何にでも、感応によってはならされるということですが。このことを否定できないのは、みなさんは今の自分

の人間というかたちを、
もちろんこれは人間で
あるということは、あな
たは無意識でそれを必
ず選択したことはあ
るのですが、その自我要
求として、あなたはあな
たという人間のかたち
を先導的に、自ら絶対的
な主導権を握って選ぶ

ことが今まで、できていたと思いますか。それは違うと思います。たとえば、自らが人間を選ぶことを、自分が望んで選択したとしても、それは必ず、無がそのあなたの抵抗、積んだものに無の全体記録がそこに恣意の無い、自然な時間反応と

して、みんなにとって正しいことを推し量って割り当てたものであるからです。つまり、無は必要な場所へ必要なものが割り当てられることを見込んで化学反応を起こしています。化学反応とは、あるものがまた違ったあるものと組

み合わさることによって、時の経過による意識のかたちの違いの接触または結合によって、また新しい別の物質へ変化することですが、実はこの世界は意識の世界であることから、つまり、この世界はどこも無意識でできていて、つまり、

みんなの本当の心で、できていて、その心の遣り取りに、今の自分の認識状態がこうであるということ、それぞれが自分、相手の無意識のミラーのおかげによって認識されていて、たとえば水で申し上げますと、水とはこの空間一見何も

無いようなところの無
が集中して、永遠とは果
てしないものでありま
すから、いつまで経って
も終わりはなく、終わり
がないことによって自
分の永遠の自覚を保証
されているのですが、し
かし相対、周りとの関係
性から、自分の恣意、わ

がままな自我を保存し
たかたちで永遠という
時を過ごしていけない
ことを、その果たされな
い宇宙の涙を、この空間
一見何も無いようなと
ころからあらわれる空
気や次に変わる水は、そ
の意識の思いをわかり
やすいかたちとしてあ

らわしています。これは、
無の無いの頃より時と
は永遠経ったことから、
しかしそれでも、この空
間一見何も無いような
ところから、空気や水な
どのこちらの世界に循
環として意識されるも
のは必ず必要なこと
でありますから、それだけ

完璧な無意識に生きる
ことは難しい、ふえる生
命とふえる永遠の波長
状態を完璧にこなすの
は簡単でもありますが、
難しいということです。
自分の無意識とは本当
に永遠のことをしてい
ますから、それを掴み切
ることは難しく、そうい

った意味では、存在とは、
いつも普段自分が望み
に思っていることが、そ
のまま自分の無意識の
望みと一致しているこ
とは、わからなくて、し
かし、無意識の望みは必
ずあなたの本当の望み
であることから、そうい
った意味では、存在とは、

自分の自我を取り除いた無意識の考えで、無意識のままに生きることは、諦観、(自分をみんなのために譲る気持ち)正しく諦めてみれば簡単でありますが、しかし、永遠とは終わりが無いものですから、難しいと言えれば難しいものであ

ると申し上げられます。
ただこれは、あることも
指していて、存在とは、
このふえる無の世界の
中で、自分が循環を必要
とする分は、自分も循環
の何かの役割を必ず果
たさなければいけない
ということです。存在は、
全員この意識の循環の

役割を果たし続けながら
今を生きていますが、
それでもなお、循環にさ
れる場合は、そこにはた
だ、自らが望んだ、無常
があることと申し上げ
られます。無常とは、た
だ単に常であること、そ
こに私情を挟まない厳
格な物の流れを指しま

すが、循環に流れていく
としても、たとえばそれ
が人間でしたら、それは、
いわゆる肉体の死です
が、その憂き目に自分が
遭うとしても、それはあ
なたの普段取っている
行動がそのまま次の自
分の自覚の循環を暗示
にあらわしていて、それ

は無意識に蓄積された
かたちとなり、それは当
然いつか、自分の目にも
見える、身体に感じるか
たちとなるのですが、表
面の自分の意識では、自
分がそれを望んでいる
とは思えないことによ
って、しかしその、望ん
でないあなたの悩みが

あらわされた姿が、その
苦しみがそのままあなた
の無意識を指していて、
その苦しみがそのまま
あなたにとってもみ
んなにとっても、無常と
いう抵抗となり、そこには、
恣意やわがままな考
えが入らないからこそ、
あなたは次の自覚にも、

愛の自覚に生きていく
ことができるのです。こ
の世界は無で、できてお
り、その暗示、意識構造
には限界が無いことにな
っていますが、ある形態
はある形態をなすか
たちに、存在や世界はふ
える生命とふえる永遠
のかたちに生き続けて

いくことができますが、
しかしそこにまだ、苦し
みの無常が働くことによ
って、存在はそこにまだ
足りない何かを自分に
無意識に思うのであり、
無常をみて、人はそこに
自分を人の役に立つ、
苦しみの意識に自分を
推し進めることを思

えるのです。厳格に働く
無常とは、そこに働く苦
しみや悲しみに、存在を
正しいことへ促す、そう
いった役割を果たして
います。

話に戻りますが、火は
自然と人間との関係性
の中で、そのお互いお互

いの、必要に理不尽と取
った部分、もしくは無い
と正しく意識された部
分発生し、その中で自然
を捉えますと、自然は人
間がいなくて自然だけ
育つのであれば、そこ
には何か、もっと能動的な
人間という存在の何か
が足りないと思えます

し、人間が人間だけで育つのであれば、そこには、やはり何か環境といったものが足りないように思えますし、つまり、今ある全ては、これも、みなが無意識が自由を、正しさを求める物理の必然の反応が意識できるかたちにされた姿で

あり、申し上げますと、
ふえる相対において人
間として暮らしていく
中で、その、ありとあら
ゆる存在たちはそれぞ
れ固有の信じるものを
持ち、それは、間違いで
あったものも、正しかっ
たものもあるかもしれ
ませんが、そのどちらも

その存在には、お互いが
違う考え方を持つこと
によって、お互いの考え
方を発展させるという
意味があり、その中で、
人間とは自然と共存す
るべき存在ではあるも
のの、自然を自分の都合
に利用することも、その
能動的に与えられた姿

かたちで自分たちで選
択してきたわけです。し
かし、これは考えてみれ
ば当たり前前で、自
然には自然という固有
の抵抗、波長があり、人
間には人間の固有の抵
抗、波長があり、その中
で自然には自然の主体
があり、人間には人間の

主体がある中で、その存在同士には決して必ず一致しない部分が発生することであり、つまり、自然にとっては理不尽なことでは無くても、人間のふえる相対の憎しみの中においては自己が及ばない分については、自分は自然に何かの

かたちで助けを求める
ことが自分にとっての
理不尽では無いという
解釈の選択があったと
できます。以前にお話し
しました。重力というの
は無いようなところほ
どあり、そして、重力は
あればあるほどその
時間感覚、つまり、時間

の過ぎるスピードとい
うのはとてつもなく速
いということをお話し
しました。この世界は、
みなさん今どのように
捉えていますでしょうか。
か。今、まだ西暦200
0年たかだか、永遠の本
当に始まりでしかあり
ません。もちろん、この

空間一見何も無いよう
なところもそうですが、
いつも永遠の始まりに
は固定されるものの、現
象としてはこの空間一
見何も無いようなところ
からは、あくまで人間
を自然なかたちに、無は
全てで唯一であり、どこ
にも時間に影響されな

いかたちで働く以上、これからも私たちに對する、ここからの私たちに對する無の与えというのはふえ続けるだけで終わることが無いわけです。もちろん、私たちの世界も一見その構造には何の問題も無いように見えますが、実は私

たちの世界も、この世界の色々な物質、ありとあらゆるものの循環に使われています。もちろん、無意識から発生する無のかたちや、その集中のスピード、性質などは全て私たちの意識に応じますので、油断は禁物ですが、私たちは一見この

世界で取ったものを消費して、次の消費を探しているだけかのように思いがちですが、実はそうではなく、自分が、循環として自分に回ってきた物を、また、自分にみなさんに循環として回ってくる物を、その物を理不尽なかたちの物

質にしてしまうのではなく、つまり、無理な抵抗をかけて、その物質を次の循環にするためには、長い時間や、多大なる苦しみの抵抗を伴う物質としてしまうのではなく、あくまで無、この世界の全体の今の暗示の状態を見切った上

で、循環の際、そのエネルギーとなるものを使用しても、または使用しなくなっても、すぐ、その物質がなるべく自然に無駄な抵抗が掛からないように次の循環へ進めていけるものを、自分たちの使う物質として、それだけを、物質を

そういったかたちに扱
うようにすれば、この世
界のリスクのあるエネ
ルギーや理不尽を伴う、
結局は自分が苦しむだ
けの循環は防ぐという
ことができます。何しろ
無は時間に本当に影響
されないかたちで物凄
いスピードでふえてい

ますので、みなさんのそ
ういった心掛けや、物質
の取り扱い、または、作
る物質をそういったも
のにみなさんが意識し
ていくことは、それはそ
のままそのかたちに無
意識がふえていくこと
も指しますので、この世
界はある種の無理をし

た理不尽な抵抗を伴う
エネルギーや物質を必
要とすることがなく、自
分たちが自然にみんな
に先のことを考えて思
いやっていることが、そ
のまま、自然があなたの
無意識の求めに強す、エ
ネルギーや物質を意識
に必要なだけ必ず与え

られる、ふえていくことを指します。今現在、私の方から、今もう既にあるかたちを以って、たとえばますなら、原子力が駄目だとは申し上げません。これはなぜなら、電力会社の責任だけではなく、このかたちになることは、今までのみなさ

んの無意識の過ごし方で必ず決まっていたことで、それは必ずみなさんが無意識で全員同意承諾必要として選び取ったことであり、ここに気づいて、原子力はリスクがあると、それをまた循環に再利用するにも時間が掛かると、それは

する前からわかっていたのでありますが、問題になった今になってそういったこの世界に対する何かの必要性をみなさんが認識してきたのであり、そう思うのであれば、よくないかたちは、よくないかたちと思うのであれば、それは自

分たちがその無意識の
思いによって改善しよ
うと心掛けていけばい
いだけであり、必ずその
需要に無意識は何かの
かたちで、それはこの空
間一見何も無いような
ところからの無、つまり、
その無の集中によって
起こる私たちに意識さ

れる物質の何かが私たちの無意識の心掛けに比例してふえていくことを指しますので、そうといった意味では原子力とはそもそもその元となるウランは自然から発見されたものであり、そこには必ずみなさんの無意識の理不尽な思

い、もしくは無いという
正しい意識がミラーし
た化学反応であり、それ
を利用するかたちにな
ったのも必然であれば、
それを利用して、自分た
ちの理不尽だけに応じ
ていることはよくない
んだと、こう気づいたの
も、それも、したからこ

そ解ることが出来る物
理に起こる必然の反応
であり、また暗示の教え
でもあります。ですので、
これからはなるべく理
不尽を無くすよう、この
世界全体で心掛けてい
けばいいだけであり、無
は理ですから、理に沿っ
ていれば沿っているほ

ど、そこには正しい意識
が生まれますので、以っ
て無は果てしないこと
から、みなさんがみんな
を思いやる気持ちでこ
の世界を過ごすことは、
この意識の世界がみな
さんにとってよりよい
エネルギーの需要と供
給の発展し続ける世界

になると申し上げられます。実はエネルギーも無いようなところほどあり、実はこの空間一見何も無いようなところには宇宙、世界があることから、そこにあるエネルギーは核エネルギーとは比べ物にならないエネルギーがあるので

すが、物がエネルギーとして循環に使われるまでには、つまり、無いようなところから空気として出現して、水になって、大地にしみ込んで、堆積し、今までの時間の経過にあったものと色々な化学反応を起こし、そして、人間にとっ

て必要な様々な資源として使われるまでには相当な時間を要しており、それだけの時間の経過を要しているということは、そこにその物が、その資源に変わるまでの無の無に対する時間の愛の与えがあったことであり、この世界は、

無（愛）にしてもらった
ことを無（愛）にして返
すという時間の経過に
おける相互の法則があ
り、存在や世界が、様々
な物や資源として使わ
れるまでには、もちろん
全てのものは全てを兼
ねているのですが、そこ
には無の時間の経過に

おける多大なる愛の与えが必要で、私たちは、正しい意識で過ごしていく中で、その世界の中において、自分たちがこの世界に感謝した分だけの明らかに時間の経過に許されたかたちで発見される物質などを、この私たちが住む地球

に損傷が無いかたちで、
それを頂き、またそれを利用したあとは、それが、
自分たちの時間感覚で見込める、また自然の循環に戻せる、また新たな化学反応を見込める、そういうかたちでの資源の採掘、利用を心掛けていくことが良いと思

われます。全ての物は繋がっていることを意識して。なお、時間の法則によってこの空間一見何も無いようなところからの、つまり、無いようなところからの強制的なエネルギーの搾取は暗示によってできないこととされています。

相手の世界に不必要な、
現状過大であるストレ
スを掛けることは、それ
はそのまま、自分たちの
住む世界にも同じかた
ちでストレスが返され
ることを、このミラーの
世界は指しています。こ
のことは、この世界がど
こも無、波長の世界とわ

かればいずれ気づいて
しまうことなので申し
上げましたが、暗示は必
ず正しい時間の経過の
法則に忠じていますの
で、この無いようなとこ
ろから不必要なエネル
ギーや資源を引き出す
ことは、暗示で現在でき
ないこととされている

ことから、正しくないこと
とはこの世界できない
ことから、敢えてここで
申し上げさせていただけ
きました。(暗示として
できないこととされて
いることは、そのまま無
の力で物理的なエネル
ギーがそこに働きます
ので、現象としてそれを

起こすことができません
ん) エネルギーに限らず、
全ての物はそうであり
ますが、みなさんが正し
ければ正しいほどその
意識はその正しさに応
じて色々なことが許さ
れてきますので、これか
らのエネルギーや資源、
物質、または人間の身体

の構造などは、みなさんが正しく意識を過ごしていく中で、その正しさの時間の経過に応じて色んなことは許されていきますので、これからのことは正しく過ごす自分のみなさんの時間の経過を待ってください。無とは必ず正、正し

いことにしか応じない
ことを忘れないでくだ
さい。みなさんの意識が
正しければ正しいほど、
この空間一見何も無い
ようなところからの唯
一の無がどんどん集ま
った空気や水などの、ま
たは、他の物質の意識化
は速いので、みなさん必

ずいつも自分の思いや
行為を必ず正しいとこ
ろに置いておくように
心掛けてください。無が
○→・にこの世界の密度
化を進めるとしたら、私
たちもふえる生命とふ
える永遠の意識を持っ
て、この地球含めた空間
宇宙を、その唯一の無の

世界を○→・と無と同じ意識で、この世界が永遠に続くことを信じ願ってください。無と同じ意識で過ごすことは、この世界や自分の自覚がふえる生命とふえる永遠の波長に合ったかたちで過ごしていけるということをお忘れなく

ださい。全てはあなたの波長に応じ、全てはあなたの波長が自分の住む波長の世界を決めます。なお、無の意識と申し上げましても、一概に修行僧のような生活をしろというのではなく、そうではなく、存在それぞれには必ず役割があり、こ

の社会はみんなを以ってその構成が成り立っていることから、つまり、一人一人が今の社会の構成を支えているため、たとえば、養鶏場で卵を集める人がいなくなっただけで、実際にこの世界はその循環のしかたに大きなストレスを感

じるかたちになってしま
います。はっきり申し
上げますと、それだけで
本当に社会が何か回ら
ない現象が起きていき
ます。卵は生命で本当に
ありがたいものですが、
それに限らず、ありとあ
らゆるものには感謝を
し、そして自分の意識は、

俗（この世界で色々な誘惑が見えるところ）に入
って尚、普段の自分でい
られる。無意識に動ける
自分である。そういった
感じがいちばん大切です。
ふえる生命のふえる
永遠、目指すと、改めま
すと、本当に大層で大変
な目標かのように思え

ますが、その基本は自分が
生きていることが正
しく相手の迷惑になら
ないこと、正しい相手の
迷惑にならないこと、自
分が生きていることが
他の正しい何かを生か
す元となること、自分が
生きていることが他の
正しい存在が生きるた

めに役に立つこと、大した
こと出来なくて構いません。
みんな一緒にやるから大きな
力になるのです。波長の世界
は本当にあなたの波長に
応じていて、あなたが正しい
ことを選ぶのならば、憎しみ
や怒りを改め、自分が生きて
いることが

みんなのためになるよ
うに心掛ける、それは、
あなたはその分だけ必
ず無の意識と自分の意
識が一致し、当然あなた
が出会う人や出会う出
来事はそのあなたの波
長に応じた人、ものに変
わりますし、逆に申し上
げますと、あなたが正し

いことを選択しない場合は、そんなことはこの無の世界で結局はできないのですが、何にせよ正に直されるので、ただ、その直される分はその分、あなたにとって苦しい人や出来事が現れるということです。この世界は生きていく上で全

く苦しみを排除するわけにもいきませんが、苦しみとは永遠死の思い、行為に終わらないかたちで積み続けるものでありますので、ただ、いろいろな苦しみを自分で作ってしまうことは避けてください。この全く無い世界で、どんどんみ

なさんの思い、行為、その意識が全く無くされている世界で、どう過ごすかは程度の問題であります。全無のコツは自分が生きていくことが苦しくならない程度に自分ができる範囲で自分と与えられる正しい何かを与え続けるこ

とです。それが私にとってはただ単に暗示であるというだけで、みなさんはみなさんの役割があり、みなさんはみなさんの今置かれている立場の中で、自分の役割の中で、できることを自分が与えられる正しいことをこれからコツコツ

と続けていけばいいだけです。なお、与えられる無（愛）の量は自分が積んだ無の量に必ず応じ、それは時間にふえる傾向にあることから、今あなたが居るということは、そこにも必ず何かの無（愛と真実）があるということであり、それ

は、あなたが選択したこと
とであり、これからもあ
なたは無の中で必ず愛
であるという経過を送
っていく以上、決して今
の自分の状況を無に不
満に思ったりしないこ
とです。無とは必ずいつ
も、どこの誰にも最大の
平等フェアな無で応え

続けているということ
を忘れないでください。
また、わからないとは思
いますが、相手と自分の
苦しみを比較、比べ合
っこするのはやめてく
ださい。自分には自分の
課題が、相手には相手の
課題があり、決して積ん
だ無の量とは他の誰か

と比べ合っこするものではなく、また、傍目に見て、無に恵まれている人が居たとしても、それはただ単に無がその人の積んだ無に応じているだけであるので、そんなときは、そうなっている相手の幸せに嫉妬するのではなく、そうで

あれる相手の苦しみに
思いやりを持ち、自分も
さらなる無を目指そう
と努力できる、そんな自
分でいつも居てください
い。無の、無の与えには
理不尽がありません。時
間もあくまで無が創出
した概念、そういう意識
感覚であり、無自体に時

間の制約はなく、変わって、無はその逆に時3という暗示のかたちで永遠を伸ばし続ける、更新し続ける、永遠という限り無いものが伸び続ける、変化し続けるのならば、そこには必ずその作用に見合ったそれだけのプラスの作用がある、

つまり、それはありとあ
らゆる意識物を法則に
正しいかたちで新しく
進化させ続けていくこ
とであり、無はいつもど
こでも負荷の全てであ
り、それによってプラス
の全てを生み続けてい
ることであるから、それ
によってこの世界を新

しく進化させ続けます
ので、あなたにはそれ
に見合ったふえる生命の
ふえる永遠という時間
が与えられています。あ
なたはその中で自分な
りの無を目指し続けて
いけばいいだけです。与
えに限りがあるもの無
（愛）では無く、しかし

それは、全て正しく与え続けられるということです。無は苦しみの全てであるものの、その無はどこにも働き、あなたにもあり、そしてあなたはあなたなりの無が必ずあるということです。無は限りが無い存在です。でしたらあなたも、自分

の正しさに応じて、自分の正しさに応じた、限りが無い存在になれるということです。望むのであればその無意識に、あなたの本当の意識にもとづいて、あなたは必ず自分の望んだ、自分が望んだ通りの、もしくはもうなっている方もお見

えになるかもしれませんが、必ずあなたにはいつも無が、あなたの心の反映のままにあなたを映していることを忘れないでください。ただここで忘れないでいたただきたいのは、あなたも、道歩くその傍に落つ砂粒も、必ずその生命は積

んだ無に、平等に扱われていることを忘れない
てください。大事なのは
悪く相手を意識すること
ではなく、自分が自分
のしていることを本当
に正しいと思えるか、自
分は自分だけでも正しい
ことだけを意識して
続けていくことができ

るかどうかが大事な
ことです。ぜんぶ波長、自
分の思う、することはぜ
んぶ永遠の波長で取ら
れていることを常に意
識して、これからを弛たゆま
なく、油断しないで過ご
して行ってください。あ
なたが無意識に過ごし、
あなたの無意識の密度

が高くなってくればわかります。憎しみとは本当にこの無い場所、唯一の世界でくだらないこと、もったいないことでしかありません。自分の永遠を損するだけ、結局そこが消されてしまうだけです。悪い部分を直してくれているんだか

らいいじゃないのかと
いう考え方もあるかも
しれませんが、その分、
無に迷惑を掛けている
ことを忘れないでくだ
さい。消してみんなのた
めの抵抗にはなってい
るのですが、そこに自分
はみんなのために悪い
ことをしているという

甘えを持たないように
してください。時間に何
か届かないものを、切な
いものを思ったとして
も、それはあくまであな
たの永遠の本当の自覚
のためで、たとえば今世、
肉体の死を迎えるとし
ても、その行った先には
必ずあなたは前の自分

よりもその時の今の自分に満足する自分がいて、あなたは必ずこのふえる永遠の法則から逃れられず、生きていくことができます。無はこの時間という概念でさえも、必ず必要として選び取っています。よく考えてみてください。この世

界最初から、たとえば、人間として生まれてきて何も努力しないで永遠の生命が与えられている世界だったとしたらあなたはどうしますか。そこに努力や相手のために積む苦しみが発生すると思いますか。死ぬからこそ人（存在）は

そこに無常（ただ常であること、ありのままであること）を思えるのであり、苦しみを思えるのであり、後悔や反省を思えるのであり、生きることの尊さを学べるのであり、いつも今の一瞬を大事にするのであり、次の自覚に変わってしまう

としても、そこに永遠を
思えるのであり、肉体に
も死ぬことによってあ
なたの永遠無意識は守
られているのであり、無
死、無という苦しみに応
じていなければ死ぬと
いう死生観からあなた
は今後生きていくこと
を伸ばせるのです。生ま

れた全ての物が無いという苦しみにさらされないことは、生命の尊さや苦しみや、生命が苦しみで成り立っていることを、生命が生命あることの意味を学ばないことで、ひいてはそれは、そのものが自分以外の相手の生命を、相手の幸せ

を尊重しないことに繋がってしまいます。それは、自分を殺すことです。それは、愛ではありません。考えてみてください。生命として生まれたものが、もし、最初から自分のことを永遠の生命と知っていたら、何もしなくても努力しなくて

も自分の永遠の生命が保証されているとしたら、そのものは特に相手を顧みることがなく、そのことによってそのものはこの無の世界で必ず永遠で無くなってしまおうでしょう。考えてみてください。生命とはどこから来ていますか。無

から来ています。無の愛
の与えは永遠です。自ら
苦しみを積み続けるこ
とを何とも思っていま
せん。しかし、そこから
生まれたものが特に相
手を顧みることなく自
分の生命だけを自分の
幸せだけを気にして生
き続けていくとしたら

どうでしょう。そこには、
無の愛の与えの永遠の
意識と、そのものが自分
のことだけしか気に掛
けないその意識とでは、
そこに比較が生まれて
しまうのでは無いので
しょうか。そのことによ
ってそのものはその比
較分だけ、どうしてもご

まかしの効かない、その意識分だけの、その思い、行為分だけの限りを自分に作ってしまう、持ってしまうのでは無いのでしょうか。無である以上、それは相手が良くても自分が許しません。自分の本当の心がそれを許しません。無という苦

しみはそのためにある
のです。死ぬという苦し
みはあなたへの本当の
愛のためにあるのです。
無の思い、行為に足りな
い分は無に伏せられる
ことによってあなたは
あなたという永遠の自
覚でいられるのです。気
づいてください。思えば

この世界は無より発生したものが、無とは真逆の行為を繰り返してきました。それはなぜだと思えますか。それは、無より生まれその無意識に永遠と知覚してよりその存在が、自分が無に生命いただいたことを、幸せでいられることを、

無、愛に根拠を思わなかったからでは無いのでしょうか。愛にされていることを、愛にしなかったからでは無いのでしょうか。それがあなたの憎しみを引き起こし、この世界を極端な憎しみの世界に変え、この世界の物は自我と無意識を

行ったり来たりの極端に寿命が短い世界になりました。あなたの無意識は知っているはずで、唯一の無が、力の全てであることを。それは、現在無の意識法則に沿っている、沿おうとする自分であることも。あなたはかつて過去に無意

識で、自分が永遠を与えられたことよりも、相手が光っていることをいつも気にしていました。相手は無いとただ意識を与えている。そこに、ただ意識をもらっているだけの自分では、それは、与えている側の相手の方が自分よりも苦し

いと自分の意識によつて意識されてしまうのは仕方がないことだったので無いのでしょうか。今は無を気にしています。かつて、相手はただ、相手の生命のために全死に続けているだけ、そこに嫉妬を思うことは本当に正しかった

と思いますか。自分にとって我慢できないことだったと思いますか。唯一とはあなたを生きし続けることであり、みんなを生きし続けることであり、力を欲しがっても、それは絶対に手に入らないことだったので。それどころか全無は

いつも最大にあなたに
力与えていました。そこ
に嫉妬、かつてのあなた
の思うことは、みんなを
殺してしまおうことで、相
手のためだけに生命を
永遠に与え続ける無に
は絶対に不可能なこと
だったのです。それは尊
くなく、作用として小さ

く、それは暗示となり、
それはあなたの本当の
無という心があなたに
力与えることを許さな
かったのでは無いので
しょうか。正しいことし
か。今のこの世界とは、
正にそのときのあなた
の心やみなさんの心が
そのままミラーしたか

たちであるのです。無は無を与え続けています。無い（愛）という真実。そこに諦観を思うこと出来ませんか。かつて無が辿った道と同じように。自分の行く永遠の先の道は、自分が自分であるという自分に拓ける道はそこにあると思い

ませんか。永遠に無いと
いう思いと行為。無は概
念に進化し、自分に課さ
れる無は今までの自分
に応じ、これからのみな
さんは本当の自分の意
識と向き合って、今自分
に何ができるのか、何を
することが自分にとっ
て大切なのか、真剣に考

えてみる必要があります。苦しみに憎しみは似合いません。それが、死しても次の自覚へ自分を生かす元となります。永遠とは結局、時間にどんな意識を貫いたか、どんな自分を貫いたか、ただそれだけではあるのではないのでしょうか。無

にはいつもこれ以上の
与えは無い、ありません。
あなたの目指すあなた
とは、やはりあなた自身
が目指したあなたであ
るのです。永遠を正しい
相手のためだけに自分
に無いと生きて生きれ
るか。全無、その先に愛
の自分はいます。今まで

の、自分の周りにある全
てとの、無との比較に、
あなたには永遠が永遠
に無いことを思えまし
たか？でしたら大丈夫
です。あなたは必ずいつ
か時間の経過に自分の
望んだ、みんなにも望ま
れる全無になる時が来
ます。今思えないという

方がお見えになっても、必ずあなたは無意識で思っていて、それは暗示になり、必ずいつかあなたを全無にする時が来ます。これからの意識を大事にしてください。これが、この暗示が今のあなたにとって最大の愛であることを忘れない

てください。全無、永遠の先には必ずあなたは望んだ自分になっています。波長は、（暗示で出る言葉）まだ時間が早すぎる、もう少し時間を待ってくださいということです。これはこれからの時間を待つ気持ちを持つ、これからの時間

を大切に過ごしていつ
てくださいということ
です。憎しみは愛に変わ
らず、苦しみが愛に変わ
るのであり、憎しみのそ
ういった性質に気づけ
たことをよしとしてく
ださい。無は必ずあなた
の意識そのままをミラ
ーすることを忘れない

てください。必ずこの言葉があなたの生命がいちばん永遠に伸びる言葉です。

それでは次のテーマに入ります。テーマは前の話題と少しかぶりますが、人はなぜどうして死ぬのかです。

まずこの世界がある理由から考えてください。まず、この世界は無で、できていて、その概念、存在をもって無は永遠の孤独であることから、無い（愛）という相対を生み出し、無はその性質をもって限りが無

いことから、その相対も
ふえるばかりで、生命が
ふえれば求めもまたふ
え、それは概念のかたち
を今の無の暗示のかた
ちに進化させました。永
遠にふえる生命のふえ
る永遠という世界。この
世界の中では、いつも自
分はその時間の経過に

どんどんふえる無（みんな）の密度にそのふえる数に押されるかたちでその生命を伸ばしてもらっているのですが、その永遠を幸せにしてもらっているのですが、その中においては、その自分のふえる生命とふえる永遠の量はあくまで

自分が無意識、本当の意識で思っている、行っている正確な意識の量に応じ、しかし、それは無の無の与えがいつも時間に影響されない最大の与えであることから、そのことが指すことは、その思いや行為はそんなに難しくはなく、物事

というのは、できるその
量が個人個人の持つ無
意識の量に応じていて、
しかし、自分の無意識と
はいつも全（みんな）と
比べると無いに等しい
ものであるから、それは
唯一でもあることから、
そのすることというの
は、自分のすることが正

しく相手の迷惑にならないこと、自分のすることが他の誰かのためになることを続けていけばいいだけであり、その思いと行為に比例してその自覚はどんどん保存されていき、しかし、このふえる生命とふえる永遠の無の密度は本

当に時間に影響がされない、本当にどこも永遠の果てしない密度でありますので、自分が本当に思い立ったら、それはそのままその意識の密度に自分は望んだ世界に住めると申し上げられます。この無の愛はふえるだけで終わること

がありません。生命がふえることは正がふえることでもありますので、正の概念が発達し、自分の自由は一見無くなるかのように感じますが、そうではなく、自分はどんどんふえる無にどんどん無意識化されているのであり、それによって

あなたはどんどん正しいことしか思えなくなりますので、それによってあなたはストレスを感じることがなく、変わって、正しいことに自由を意識できるようになります。そういった世界をずっと続けていくと、それはそのままその

世界がふえる生命とふえる永遠に一致していただきますので、全無と言っても、何も一人で苦しみの全てを背負うのではなく、どこの、どの密度にも全無は永遠にありますので、あなたはその自己の意識の密度に応じた自覚を正しく継続し

ていけると申し上げられます。うまくいけば自分は自我と無意識を行ったり来たりではなく、自分は完全に無意識だけになり、まず、どうしてこういった書き方をしているかと申し上げますと、まず私も、100年経って1000年の

ことがわかるのであり、
1 0 0 0 年たって 1 0
0 0 年のことがわかる
のであり、ここには、完
全にはっきりと自分に
わからない現象がある
ことによって、永遠無意
識とは本当に果てしな
いものであるわけです
から、そことの、抵抗と

認識によって、またさらなる無の学びをできるのであり、こういった正しい抵抗と認識の繰り返しによって、私たちは終わらない無意識の自分を目指し続ける存在になれるのであり、そういった意味では今が完璧な無意識という意味

ではなく、これは無が与えてくれている愛の時間であり、無意識の向上とは終わらないものですから、その中で自分をしっかりと自覚しながら、着々と自分をいつも無意識、正しい意識にいつも自分の自覚を律し続けていくことが、終わ

らない無意識の世界に
自分が住むことと申し
上げられます。この中で、
相手はふえるものの、自
然なかたちで相手と付
き合う方法はあっても、
相手を嫌う方法があり
ません。なぜなら、ふえ
る相手とはふえる生命
ふえる永遠そのままを

指していて、それは、全て私たちを生かす何かの元で必ずあるからです。なおここに、憎しみは排除されています。憎しみは必要とされていません。今、時間は無い世界、どこも、どの密度もいつも永遠の最初、始まりの方にその世界の

時間が固定されていて、それによって、永遠はふえていき、それによってどこもどの密度もどの世界も無に余裕を持ち、その無はこれからもふえ続け、そして空気などは、その無が集まって役割としての意識を鏡せています。無の集中がそ

のまま意識、みなさんの心の姿をあらわしています。この世界がある理由は、みんなが幸せになるためであり、ふえるみんなが幸せになるためであり、その永遠がふえるということとは、必ずどこのどの密度もどの世界も新しく進化し続け

る世界であると申し上げられます。この世界は無の世界であることから、必ず全愛、全ての物を永遠に生かそうとする考え方、思いの世界であり、今すぐそれを頭に身体に感じるかたちとして解らないとしたら、それはただ単に無があ

あなたのみなさんのその意識の何かの養いのために時間を必要に送っているだけであり、それは必ず、あなたのみなさんの永遠のために、ふえる生命とふえる永遠のために絶対に必要で、そうしているだけで、いたずらに自分を焦る必要

は無いということです。
ただ、逆に申し上げます
と、時間を急くようなこ
とを無に欲として求め
ないことです。時間はふ
える永遠必ずあります
から、自分を待つこと
です。その間、なるべく幸
せにしていること、幸せ
な心持でいることです。

それがそのままふえる
あなたの幸せに繋がります。
有るのには無いという根拠があり、有るのには必ず理由があり、有るということはその時それが認されているということであり、それは必ず新しく進化し続け、有る、その理由は必ず全

ての理に適っています。
つまり、誰だって永遠に
幸せになりたい、誰しも
この目的のために知っ
て知らずとも無意識に
生きている、生かされて
いるのです。それが、無
の本願であり、永遠の生
命と幸せをふえるみん
なに与え続けることが

無の自然反応だと申し上げられます。物理でいう無を国語上で解釈しますと、永遠、全て、愛となります。つまり、これを物理の理と取って物事を解釈していきますと、無より発生して自分の生命を自覚、知覚してより、そこから完全に

自分の意識が、無のふえる生命のふえる永遠の全体法則に自分の思いや行為が合致し続ければ、あなたは無の全て、まさしくふえる生命ふえる永遠そのもので、物理の理論上はあなたは暗示、無意識のままに新しく進化し続ける不老

不死の存在となります。

ところがです・・・

みなさん不老不死の人

(存在) 見たことがありますか？

無いですよね。

全く無い。もちろんそれは、

これから時間が経っ

ていってその人が、ある

存在が、どう考えても、

どう見ても、どう検証し

ても、その人その存在は
明らかに存在として老
いるではなく、その逆、
正に暗示が示すままに
新しく進化し続けてい
るとはっきりとわかる
かたちになって初めて
その人その存在は新し
く進化し続ける不老不
死の存在であると認識

されるのですが、今現在
においては、それが確定
的にわかる存在という
のは、現在この地球上で
は見当たりません。実は
これには以前にお話し
した通りあることが関
係していて、それは相対、
相対と言っても正しく
相手を見ることではな

く、正しく相手を尊重することではなく、悪く相手と比べ合いつこ、たとえば、自分がいい時は、相手を見下ろす、もしくは、自分が悪いときは相手を妬む、嫉妬する、これはどちらも悪い感情です。または、相手の生命に関するもの、相手が

大切にしているものを
欲しがらる。これは例に上
げれば、意識、何でも意
識なのですが、相手が自
分を以って養っている
意識を欲しがらないこ
とです。この世界は無、
ミラーの世界であり、そ
の中ではいつも無とは
最大に与えられていて、

その中で意識とはあくまで自分で養うものであり、相手はあくまで、その相手の意識のままに尊重することが大事だということです。相手が何かに勝っているとしたら、それはただ単に物理上の何かの必然であり、それは、必ず、そ

の相手のあなたのみんなの愛のためであってそこに何か不満を思うことは、それは無の愛の与えを裏切ることでもありますし、また、自分自身、自分の無意識を裏切ることでもあります。なぜなら無意識とは必ずふえる生命のふえる

永遠という終わらない
愛しか目指していない
からです。つまりこれは、
この世界がどこも無意
識の密度がいちばん高
いことを考えれば、普通
に物事を正しく解釈し
ていけば、そんなに難し
いことでは無い、憎し
みを持たないことはやさ

しい、簡単なことである
ということ。比較に
は大、小、高、低、など
など様々な心の苦しみを
伴うものが発生しま
すが、この世界に時間が
流れていて、その生まれ
には存在それぞれに時
間差があり、しかし、無
はその存在たちにいつ

も最大の無の与えを行
っていて、それは必ずふ
える生命のふえる永遠
という平等フェアであ
り、その中で存在それぞ
れは、無意識の選択によ
る役割のそれぞれをこ
なしていて、その一つ一
つには必ず全ての理が
通っている理由があり、

それはこの世界はどこも無の全てでできている世界であることから、つまり、あなたが生きている、過ごしてきた、今見ている、通り過ぎている、これからも、その一瞬一瞬は全て完璧な無の感覚にもとづいた、あなたの無意識の同意も

入っている、完璧なあなたに対する愛の与えの一瞬の連続でしか無いということです。つまり、この世界は何のどんな出来事も全て必ず愛でしかありません。これは無の絶対法則です。時間は永遠でしかもそれはふえるばかりで正に強

すしか構造に無い以上、
絶対にこの世界には愛
の瞬間しか発生しない
のです。今そのことを思
えないとしたら、それは、
今そう思えないという
立場があなたにとって
愛であるため、無はそう
しているだけであり、必
ずあなたは愛に伏され

ているのです。この世界は比較の連続であり、その中で相手は正しく尊重し、無には終わりが無いことから果てしないことから、その中で自分は、その無の思いと一緒に、「よし、自分も負けずに頑張ろう」と今、真摯に自分を思っている

方は、多分ここまで読み進めていただいた方なら、まず大半の方がこういったお気持ちを既に持ってお見えになると思うのですが、まだ若干、世界はまだ始まったばかりで、まだ永遠の先、これから100年1000年と自分を生きて

みて、初めてそれが自分に実感できるんじゃないのか、と少しばかり心にしこりがあるような感じがある方もお見えになると思います。ただ、そういった抵抗は必ず必要で、そういった心のしこりのようなものがあるからこそ、時間に不

安があることによって
時間に油断しない日々
を送っていける、時間と
は終わりが無いもので
すから、その中で許され
ている選択次第で自分
はどうとでも変わって
しまうことは明らかで
あり、それによって人
（存在）は憎しみを選択

しないことを自分で選ぶことができるのであり、それによって自分自身で自分自身を、自分自身の無意識を養うことができるのであり、そういう意味では、まだはっきりとわかりかねる部分があって当たり前であり、それ自身が何度

も申し上げました通りに、あなたに対する愛だと申し上げられます。結局はこの世界は無の世界でしかありえず、その中でみなさんは何を迫られているかと申し上げますと、それは、立場や役割をいつも選択として迫られています。無

より発生より自分がどこへ行きたいのか、どうありたいのか、誰とどんな人と一緒に居たいのか。たとえば、例に上げますならば、とてもこの世界に影響を与える人物の近くに自分が居たいのであれば、それは当然、世界に与える影響

が強いということは、それは、正しいということも指していて、正しいということはその力は正しく扱われなければいけないということであり、その分自分はその正しさに応じた正しさを自分に持つ必要があるということです。たとえ

て例に上げますと、権力者などそういった力を持つ方の近くにいる場合は、そういった違いの無い、理不尽の無い正しい思いや行為を自分に持つ必要があると申し上げられます。全ては暗示で、この世界は元からあるものも、新しく生ま

れ来るふえる生命とふ
える永遠もみんなで正
しいことの思い方にそ
の役割と立場をこなし
ていて、これは、絶えず
循環し続けているとい
うことです。この世界は
正しさに応じて波長が
あっちへ行ったりこっ
ちへ行ったりしていて、

しかし、この世界はその
どこも、正の密度が高ま
り続けるということだ
す。その中で比較、悪い
比較のしかたは自分の
立場や役割を譲ること
であり、ひいては、たと
えますと、あなたが今、
この地球上で人間とい
う役割をしているとし

たら、悪い比較をすること
いうことは自分の生命
を、自分よりももっと正
しい生命に譲るという
ことなんです。つまり、
この空間一見何も無い
ようなところなど無か
ら新たに発生する生命
がいつもあるのですが、
その中のものがたとえ

ば人間になりたいと思
ったとして、それが、そ
のものが人間になるこ
とが無、みんなにとって
どうしても叶えてあげ
たいこと、また、人間の
あなたが今のこの世界
の無の愛のバランスを
考えたとき、自分がしりぞ退い
てあげることが自分の

無意識でいいと同意、承諾したときに、あなたは間違いなく、みなさんにいちばん迷惑を掛けないかたちで何かに悪く必要なだけ比較を思っ
て、その比較分あなたはこの世界の人間という役割における寿命を減らされて、そのものと自

覚を交代し、そのものは人間へ、自分は違う別の自覚へいくことになります。これも、必ずあなたの今までの思いや行為も全て含めた無意識の記録の全体記録との照合の無の完璧感覚にもとづいています。無は全てなので、意識は全て

なので、悪い比較をすることはその全てが欠けた瞬間を指しますので、その部分は自分は必ず、他の正しい何かを積むか、または、その部分、自分の今回、人間というかたちに限って寿命を限られて、また、正にふえた次の自覚へ行くと

いうことです。どちらが
幸せかは私にはわかり
ません。ただここには、
無の永遠の深淵なる働
きがあるということ
です。忘れないでいただき
たいのは、あなたは相手
になれないということ
です。あなたはあなたに
しかなれないというこ

とを忘れないでください。
正しく相手を尊重し、
その中で自分は負けず
に自分を養うことだけ
考える、まさしくこれは
無の法則にならってい
る生き方ではあります
が、その中で憎しみとは
正に生きるか死ぬかの
選択をしていると思っ

てください。この世界は無が時間に影響されない特徴であることから、愛の波長は時間に影響されないかたちで存続、存在させることができ、しかし、必ずその結局を以って存在の誰もは、必ずそのどこも無の全ての上がる意識の圧力に

よって必ず全員全存在
がふえる生命のふえる
永遠の愛の波長に帰せ
られているということ
です。ですので、自分を
心配する必要は絶対に
ありません。なりたいも
のがあるのであれば、あ
なたはいつか必ず時間
に強した、あなたの抵抗

に応じた、あなたにとって愛である、その何かに必ずなれるということです。時間は経過していきます。それは、果てしないもので、この中では自分の思いに応じてどんな役割も演じることができます。そこには後も先もありません。どんな

自分にもなれます。自分の可能性には限りが無い、それは相手になる必要は無い、自分は自分になればいいということです。この世界は実は、唯一の無とは、つまり、本当に正しいこととは逆の集中、つまり、時間や存在の生活を送って

きた歴史があつて、しかしそれは、本当に正しくないことを一気に学び切ったのであつて、それも、誰の無意識にとつても結果を以つて考えてみれば愛の現象であり、無はこれからも毎瞬毎瞬永遠という意味不明のスピードでみなさん

に対する無意識の、正しい意識の与えを行い続けますので、その中でみなさんは自分が自分であるという、ふえるみんなと相互に生きていける、ふえる永遠絶対正しいという自分なりの唯一の無波長を見つけてください。ただそれは、

無に与えられたこと忘れずに。無いもの、永遠とは果てしないもの、絶対に終わりが無いものであることを忘れないでいてください。終わりが無いということは、無いもの相手には勝ちようが無いということです。誰しもどんどん無の

意識にもとづいて無い
ものです。また、無の波
長とはあなたにとって
いつも必ず適切なもの
が与えられていること
を絶対に忘れないでく
ださい。無には真実とい
う意味もあり、真実は永
遠の先にあり、真実は自
分で作るものだという

こと、そのための愛はい
つも最大に与えられて
いることを忘れないで
ください。また、もう一
つの考え方として、人が
死に、その肉体を土に返
し、それらが時代の流れ
によって、またその世界
が、構成、再構成され、
別の世界へ別の物質へ

変換、再利用されることは、永遠からすればほんの瞬きの時でしか無いということです。私にも、暗示で解ることには限界があり、それは必ず無意識の愛であることはわかるのですが、この感覚の中では、無意識というのは、いつも永遠とい

う私たちの時間感覚では絶対にわからない、捉えきれないスピードでその集中をしていることから、それは、絶対愛でもあるのですが、その絶対愛は自分だけでなく、そのふえている絶対愛自身にも、そのそれからふえる絶対愛が意

識にミラーし続けること
とですから、そういった
意味では存在とは限り
ないものであり、この中
では、存在とは、無意識
に永遠を思う、自分が無
意識にされることに永
遠に思う、つまり、この
世界は果てしないもの
であり、果てしないもの

であり、そして、そこに働く愛も果てしないものであり、その中では、今の自分だけの望みにとらわれるのではなく、もっと、この世界を大局的に見て、いつか必ず目にも見える、明らかにわかるかたちでの達成される、自分のふえる生命

のふえる永遠の自覚の
世界に、そこに相手も含
めた全員に対する永い
目線の思いやりを持つ
ことが正しいことなの
かもしれません。永遠と
は愛に。つまらないこと
かもしれませんが、私も
暗示を書いている身分
でありながら、その中で、

暗示の確かなことは絶対として自分はおわっているのに、それでもなお、生活していく上での生きていく自分に疑問を思うことがあります。うまくいかない、こんなことぐらい、そういった思いには、それにはやはり、無とは自分だけでな

い、みんなのためである
という絶対的な愛がそ
こに働いているからだ
と私は思います。全ては
無に、時間とは愛でもあ
りますが、本当に私たち
を正しさに苦しめるも
のです。愛のために苦し
みに。諦観。

1 1 に続く。